



Title	2024年度 意匠学会論文賞・論文奨励賞選考結果報告
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 2025, 86, p. 4-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年度 意匠学会 論文賞・論文奨励賞 選考結果報告

学会賞選考委員会
副委員長 今井美樹

論文賞

大久保尚子

大正末、昭和初期創作図案浴衣企画にみるアマチュアリズムと手仕事の染色産業との関係
—《草の葉染中形》、《主婦之友浴衣地》を中心として

選考理由

大久保尚子会員の標記の学術論文は、大正末期から昭和初期にかけて展開した浴衣の図案に関する論述である。芸術家による創作図案や、雑誌・新聞の懸賞図案募集による一般人の参加を「アマチュアリズム」と定義し、専門職としての染色、型紙、図案など各業者との協同により、浴衣地が実際に製造され商品化することを、「生活の芸術化」を具現化させたデザイン運動として捉え、その動向を丹念に追跡した論考である。

論文では、雑誌『主婦の友』の一般公募図案を商品化する《主婦之友浴衣地》(1925年)、東京の地方紙『都新聞』の懸賞図案公募企画《都新聞中形浴衣地》(1926、27、28年)、1930年代初頭には出版社が関与した創作浴衣企画が相次いだと指摘する。こうした企画の先駆には、芸術家集団による浴衣地製作があり、《草の葉染中形》(1923年)、《くれあゐ会中形浴衣》(1925年)、《藍々社浴衣》(1927年)などがブームの起点となり、浴衣を普段着にしたり誂えたりする「街着」が全国に広まったとしている。

芸術家や懸賞応募者の自由闊達な創作図案を型紙職人が補正する協業は、日常の被服をめぐる図案への興味が、専門職の仕事を超えて一般大衆にも広がり、デザイン運動として機能していることを示している。ことに芸術家集団の創作の根底には、実践的芸術運動の意識があり、筆者は、柳宗悦が所属した『白樺』、アーツ・アンド・クラフツ運動、山本鼎の農民美術といった大衆芸術運動との関連性を指摘し、浴衣ブームをその様相として位置付けている。

このように、浴衣産業の中に芸術家による創作図案と一般市民の懸賞応募という二つの活動が、「生活の芸術化」を標榜する芸術運動の理念に近接していたという指摘は、単に浴衣というジャンルにとどまらない同時代の生活空間におけるデザイン運動の一端を感じさせる。本論は、当時の浴衣産業の技術、芸術家たちの図案分析ならびに芸術運動志向、《主

婦之友浴衣地》の社会的影響、これら広範にわたる諸活動を詳細に調査しており、浴衣ブルームの興隆の中に日本におけるデザイン運動との関連を見出した本論は高く評価された。

論文奨励賞

毛 嘉琪

吉祥図像としての麻姑について

授賞理由

毛嘉琪会員の標記の学術論文は、清代（1636–1912）に普及し現代では仙女として知られる中国の女性吉祥図像「麻姑」の歴史背景に関する論考である。魏（220–265）の『列異伝』と東晋（265–420）『神仙伝』を最古の事例として、16世紀に道教の思想と融合し、時代を経て付与される逸話が明代（1368–1644）にまとめられ、次の清代に民間に広く普及したことを論じている。

その姿は宋代・紹興年間（1131–1162）の最古の麻姑図に始まり、明代には麻姑の特徴である髪型や爪、服装や小物を伴った容姿が商業出版によって流布し、清代には通俗化・大衆化に伴って記号的容姿が崩れると、20世紀には京劇の女優の演技や仕草に転じていく。世俗的な表象となった麻姑が清代に多く生産された証として、筆者は故宮博物院所蔵のデータベースより工芸品を時代別に数え、磁器、絵画・掛軸などの麻姑図が圧倒的に清代に生産されていたことを示しつつ、清代以降に増加した麻姑図が、同じく吉祥図として描かれてきた仙女の毛女図と混同された、あるいは取って代わったのではないかと推測している。

毛会員は、『デザイン理論』83号に掲載の学術論文「毛女図像の研究——大阪市立東洋陶磁美術館蔵《五彩仙人図盤》を題材に」で、明代の漳州窯に描かれた人物像が毛女であることを突き止め、その容姿の変遷を辿り、裸足を見せる毛女図は、漢民族女性の「纏足」の風習と結びつけられ、纏足が最盛期の清代には性の象徴として忌避されることにより、描かれなくなっていく様子を論じている。この2つの論文が、麻姑図と毛女図の変遷を補完しあう論考として評価された。いずれの論文も日本における展開にも言及することで日本と中国の国際文化交流も示唆しており、今後に続く研究も期待される。これらの研究業績を踏まえ、本論文は論文奨励賞にふさわしい論文として評価された。

選考経緯

2024年度の「論文賞」「論文奨励賞」は『デザイン理論』84号、85号に掲載の8編を対象とし、学会賞選考委員8名全員が選考を行った。事前に各委員が1位・2位・奨励賞

の選出とその理由を記述し、これらの結果をもとに後日、ディスカッションを行い（村井委員、米屋委員は欠席）、各論文を精査することで上記の結論を得た。

論文賞については、丹念な調査と堅実な研究テーマの論文に票が集まり審議は捲ったが、奨励賞については、研究テーマが萌芽的であるか、基礎的であるか、どのような主題が適切であるのかが議論され、選考委員の評価視点の相違も浮き彫りになった。これに併せて学会賞規程も見直し、奨励賞には発展性のある優れた業績を期待することとなった。

以上